

第2回「先端基礎研究シンポジウム」雑感

京都工芸繊維大学工学学部

前田 耕治

1997年3月、東京霞ヶ関で行われた第2回先端基礎研究シンポジウムに出席、発表する貴重な機会を得ることができました。日頃原子力の周辺にいながら直接には携わらない筆者がシンポジウムで感じたところを率直に紹介いたします。

受付で頂いたプログラムは100ページを越す大部で、内容も化学、物理、生物、数学など多方面に亘るものでした。また、全国各地の大学との共同研究も多く見受けられ、全体として先端基礎研究センター(以下「センター」)の活力を大いに感じることができました。また、拝聴した研究成果報告やポスター発表は、バイオサイエンスから超伝導、散逸構造の研究まで、看板がなければ、どこかの大学の理学部の学術講演会と見紛うばかりのアカデミックな内容であり、理学系の筆者にとっては非常に興味深いものでありました。「センター」の基礎研究として選ばれたテーマが決して原研にとって卑近なテーマではなく、科学全体から広い視野で原子力を支えるということを意図していることが推察されました。ただし、筆者の興味が溶液化学、分離化学にあるせいか、シンポジウムの中で核化学、核物理、固体物性の研究に比べ、最外殻電子レベルの化学や溶液化学の研究分野が相対的に少ないように感じられました。エネルギーレベルの高い反応を扱う原子力研究では仕方がないかもしれませんが。

尚、冒頭、原研理事長とセンター長による挨拶ならびに概要説明を伺いました。折しも、動燃の事故が世間を騒がせ、原子力産業へ厳しい目が注がれているときでありました。現在、大学では放射化学や核化学の教育、研究が縮小しつつあり、「センター」が原子力の安全と未来にどのような解決策と展望を指し示すのかを期待して拝聴いたしましたが、この点についての言及がなかったのは残念でした。

本シンポジウムに参加し、「センター」の全容を目の当たりにした上で、筆者は次の2点に興味を抱きました。第1は、原子力研究所の「基礎研究」とは何か、原子力の利用、原子力技術の確立・発展のための礎となる研

On the 2nd Symposium on Advanced Science

Kohji MAEDA

Kyoto Institute of Technology

究として何が選ばれたのかという点です。第2は、5年期限の研究体制によりどのように成果を取めていったのかという点です。大学においても任期制導入が検討されている最中であり、「時限」付き「基礎研究」がどのように進められるのかは大学の研究者にとっても無関係ではありません。センター長による研究概要の説明は自ずと各グループの成果披露になり、「センター」全体のことを熟知していない筆者はグループごとの評価が行われているようでやや緊張して拝聴しましたが、このような緊張感が期限付きのよいところでもありません。

上記の疑問に関連して、原研の基礎研究に期待することを述べさせていただくなら、これだけの幅広い分野の研究者が集まるならば、原子力という共通の基盤を超えて科学の議論の場を提供することができると思われます。現在の大学や学会では成し得ない「総合」の場所としての役割をもっと積極的に発揮してはどうかでしょうか。また、原子力発電が本質的に抱える課題を解決するための原研ならではの基礎研究も「センター」にあってよいのではないかとも思われます。発表の中での研究の位置付け紹介(イントロ)の中に原子力と直接的に関わったものはほとんど見受けられませんでした。おそらくこの類の研究は「センター」外の組織でねばり強く行われているのですが、「先端基礎」が「流行基礎」にならないためにも、華々しい成果をすぐには求めず、地道に年数をかけて行う基礎研究も含まれてもよいと思われます。この点は5年期限の体制と矛盾しますし、「センター」のあり方に関わる問題でありましたが、現実に山積している原子力問題に対するアプローチこそ原研の独自性につながるのではないのでしょうか。

最後に、事情も知らずに誤解や憶測で失礼なことを述べたといたしましたら、ご容赦ください。原研に期待する遠い隣人として、次の5年間に何が発展継続し何が新生するのか注目したいと思います。